



みんなで食事をするコモンミールは、ほっとひと息できる時間。写真中央が畑井さん。

たくさんの “おとっさん” “おかあさん” の中で。

コレクティブハウス〈かんかん森〉での暮らし

コレクティブハウス〈かんかん森〉には、ひととひとの心地いいつながりがあります。シングル、夫婦、ルームシェア……さまざまな形の世帯が暮らしています。それぞれの住戸は独立していて、台所、食堂、ランドリールーム、ゲストルームなどのいくつかの共用スペースが設けられ、住人同士が生活の一部を共有しながら生活する形。もちろんその中には子どもたちもいます。〈かんかん森〉での子育てとは、どんなものなのでしょうか。

多様性を認める土台の上で
はじめて自由な暮らしができる

「ここには、事実婚の夫婦や、シングルマザー、独身……わたしもそうだけれど長年のパートナーと一緒に住まないけれど、行ったり来たりしているひとなど、何でもありで、お互いに詮索しない。だって何が普通で何が普通じゃないかなんて、わからないでしょ」と坂元良江さん。坂元さんはへかんかん森に企画時から携わってきました。

「坂元さんのような自由な考え方の女性が入っていることだったら、きっと暮らしやすい、と思った」と言うフリーライターの畑井祐美子さんは、昨年10月に3歳の子とふたりで入居しました。「わたしは干渉されるのが、いやなんです。何よりもまず、わたし自身が安心で



共用スペースでの食事の支度中も、子どもたちは元気に駆け回っています。スペースが広いので、室内でも思いきりあそべるよう。

きる環境かどうか、というのがいちばん重要だと思っていました」

畑井さんはここに来て、生活が劇的に変わった、と言います。

「会社でも育児休暇を認める制度ができているけれど、現場では実際には使えない雰囲気になっていたり。世間にはまだ、仕事しながら子育てなんて子どもがかわいそう、とか、母親は子育てに専念してあたり前、という風潮がありますから。本当にラクになりました。たとえば夜、

食事をすませた後、わたしは仕事をしなくてはならない。子どもはまだあそびたいけれど、「あそんで」と言われても無理なときもあります。そんなとき、子どもには、共用スペースではかの子どもたちと一緒にあそんでいてもらいます。共用スペースは住民しか入れないので、安心。子どもとふたりだと煮詰まることも多いけれど、ここならいろいろなひとの協力を得られます。子育てしている同士で、子どもを預かり合ったりすることもある」(畑井さん)

日常に子どもがいること

子どもの成長を見るのが
おもしろい

「かんかん森」にはもちろん、子育て中のひとばかりではなく、子育てが終わったひと、子どもがいないひともあります。

「ここに来る前には、こんなに子どもと関わることはなかった」と村上佳代さん。村上さんは、食事や洗濯など親の手が離せないとき、子守役を買って出ます。

「ここに来る前は、イギリスでルームシェアをしていました。ルームシェアやコレクティブハウスなど、他人と住む形は、時間的にも物質的にも合理的だと思っ

朝、親が保育園に行く時間がなかったりすると、たまにわたしが子どもを預か



週に3回のコモンミールでは、当番制で参加人数分の食事をつくりま

って保育園に送っていくことも。預かるのは、30分とかほんの少しの時間ですが、

いまいちばん大きいひろくん（5歳）

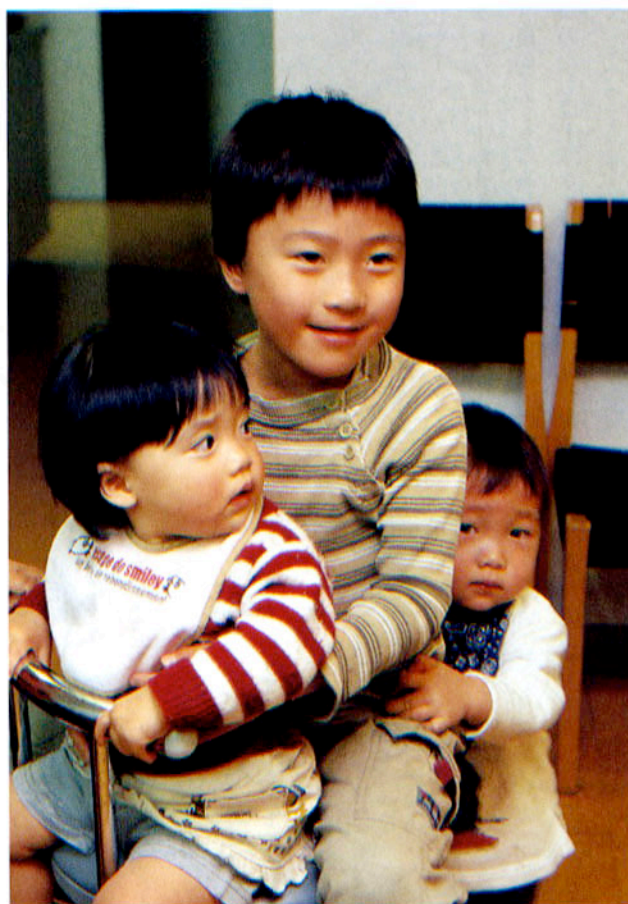
は、わたしが入居してからのこの1年で、ずいぶん変わりました。弟が生まれたり、弟分や妹分が新しく入ってきてから、急におにいさんらしくなった。そういう成長を見ていると、なんだかうれしい」（村上さん）

ここにあるいろいろな現実
に自分自身どう対応していくか

週に3回の「コモンミール」は、当番制で食事をつくり、共用の食堂でみんなが食事をする、というもの。コモンミ



食事の後は、ゆっくり話らう時間。子どもがいるひともお酒をたのしみま



真ん中がひろくん。年上の子が年下の子の面倒を見たり、子ども同士でよくあそびます。

ルに出るかどうかは自由。建物の構造上、コモンミールに顔を出さずに部屋まで行けるようになっています。

「プライベートもちゃんとある。疲れているときは顔を出さずに部屋に戻ることもあります。

でも、コモンミールはすごく助かっています。忙しいときもバランスのよい食事ができるし、家に帰って食事ができて

いるのってありがたい」（畑井さん）
「コモンミールのある日は、仕事を早く切り上げて帰ってくるようにしています。

ひとりだといふならだらしないが、ただけれど、生活にメリハリができた」と村上さん。

「ここでみんなと一緒に食事をしたり話

をしたりすると、新しい現実が見つかるというか、いい意味でも悪い意味でも、いろいろな現実があるということに素直に受けとめられるんです。「こうありたい」とか「こうあらねば」とか、理想ばかりが先に立って頭でつかちになっても、ここでは暮らしていけない。

子どもたちがこんなにたくさんいることや、他人と一緒にごはんをつくって食べたりすることを、自分自身がどう受けとめるかを発見していくことがすごくたのしい。そういう意味で充実しています。

このひとたちは、いままでとは違う新しい暮らし方をしようとしているから、考え方がクリエイティブで、刺激的でもあるんです」（村上さん）

自分の子どもでなくても、いつも気にかけてくれる大人がいます。(写真下・右)



子育ては親だけで完結しない

たくさんのごと
関わり合いながら育つこと

「子育てをするためにここに住みたいと思った」と言うのは、木下孝二さん。

「子どもがいなくても住んでいたとは思えなかったけど、もともとの動機は子育て期に入ったから、というのがあります。」

「ぼくは、子育ては両親だけで完結できるものではない、と思っているんです。完璧な人間はいないし、ぼくだって、

コレクティブハウスかんかん森

NPOコレクティブハウジング社によって企画された、日本ではじめての多世代型コレクティブハウスとして、2003年につくられました。既存の家族概念、福祉概念、住宅概念にとらわれず、ひとつひとつの新しい関わり方をつくりながら、より自由に安心できる暮らしを実践しています。それぞれが独立した専有の住居(賃貸28部屋)と、いくつかの共用スペースがあり、生活の一部を共同化する合理的な住まい。現在、28世帯42人が住んでいます。

そんなに常識的でもない(笑)。ひとの経験はそれぞれ。いろんな経験をしている

たくさんのごとから、早い時期から影響を受けられる環境は、子どもにとって、とてもいいと思う。親とは違う価値基準で怒られたりする経験が、すごく大事なんじゃないかな。年下の子の面倒をみたりすることも、きつといい経験。

それに独身時代に子育てに関与することって、あまりないと思うんです。友人の子どもとあそぶことはあるけれど、子育てに関わる、とまではいかない。

ここは子どもがいつもいる生活なので、子育て前の世代にとっては、子どもと関わるいい機会じゃないかな、と思います。本当はそういう多世代のつながりが、社会的にも必要なんだと思います」

肩に力の入らない子育ては子どもにとってもいい環境

「みんなのサポートを期待しているところも。核家族だと子どもから目が離せなくて、忙しいときはビデオに頼ってしまったりすることもあると思うけれど、ここではつねに誰かの目がある。子どもから、ある程度目が離せます。リラクセスして子育てができるんです」(木下さん)

大人が自然体でいるのを子どもも嬉しい



木下さんと下のお子さん。テラスに出て通りの車を見るのが大好き。

「ぼくはフリーの仕事を時間的な融通はきく。夕食は子どもととれるし、一緒に過ごす時間もわりとあるほうです。みんな、家族一緒に食事をしたほうがいいのはわかってはいるけれど、いまの社会状況ではそうもいかないのかも。もちろん、仕事忙しいひとにもここにはたくさん住んでいます」(木下さん)

「かんかん森」では親が忙しいときも、子どもが、親以外の誰かと一緒に過ごせる環境があります。

「この生活をめいっばいたのしむためには、家で過ごす時間を大切にできる社会にならないと」(村上さん)

「ここには地縁や血縁にこだわらない、ひとつひとつのゆるやかなつながりがある……そして、子どもをいつもそっと見守ってくれる、たくさんのおとうさんへおあざさんの存在があるのでしょう。」